

# 『にいがた「緑」の百年物語—木を植える県民運動』に求めること

石 沢 進

自然環境の保全の重要性が指摘され、緑の百年物語も長い期間をかけて木を植えて自然の保全と大切さを訴える試みの一環であると私自身は理解している。百年の計画と実行の中で22世紀以降に禍根を残す結果になっては、折角の計画も水の泡となりかねない。計画と実行にあたっては基本的な自然への考え方に理解が必要である。緑豊かな自然の創造を目指す際に、生態系の破壊につながる行為が含まれていないか、熟考すべきである。生態系の保全につながる基本的な考えの中には、

①生態系レベル ②種レベル ③遺伝子レベル

で検討して行動を起こす必要がある。単に緑が増せばよいという安易な行動であってはならない。特に、既に成立している自然の樹林の中に木を植える行動には、細心の注意を払うことが重要である。

経済的な利用目的のために、スギ、マツ、カラマツなどを植林してきたが、材木の価値低下により、新たに同樹種を植える動きは少なくなってきている。近年は広葉樹を植林しようという、動きが各地で展開してきている。広葉樹であれば、何でもよいからとにかく植林しよう、という行動に対して再考しなければならない。まだ、新潟県では、それほど広葉樹の植林が行われていないとみられるので、今後の広葉樹植林に当たっては、生態系を十分配慮する必要がある。

例えば、現在疎生する樹林に新たに植え込む場合、あるいは、裸地に植え込む場合があるとすると、そこに植える樹種は何処からの苗木を植えるべきか問題になる。例え同種のものであっても他の地域から苗木や種子を持ち込み植林することは避ける必要がある。ある地域の自然を構成している広葉樹は、これまで植林される機会が少なく、多くの場合天然更新に委ねてきたので、その土地固有の性質を持

った樹で森林が構成されていると思われる。そのような所に他の地域の樹種を導入することは、とりもなおさず、遺伝子の攪乱につながる。つまり、古来の広葉樹の森に質的な変化が生ずる機会を与えてしまう。太平洋側の同種を持ち込むことも、近隣の土地からの移植であっても遺伝子の攪乱を起こす可能性が大きい。従ってそのような行為は避けなければならない。

既に森が成立しているところでは、その森が生産する種子、それから生える苗木の育成で、または萌芽などで必要に応じて森を再生することが、大切である。とにかく、自然と思われる樹林内への植林、移植には遺伝子の攪乱を来し、その地域の樹種の性質を変えることになり、ひいては生態系の攪乱につながる可能性の高いことを認識し、最善の方策で望むことを強く要望する。

百年後に先人の残した「緑」は、その土地に根ざした地域を代表する樹林であるように「質的にすぐれた樹林」である、として評価させるべきであると考えられる。

従って、植林、移植など行う場合には、予め植林する場所の実態について十分な調査を行い、植林の方法や樹種の選定などの吟味が必要であろう。自然の実態を無視した人工的な緑の育成は、生態系の維持には無意味であることを十分理解して頂きたい。

以上のことは単に樹木を植えることだけでなく、草本を植える上からも配慮が必要なことであり、絶滅が心配であるからといって、他の土地で生産された種苗を安易に自然に戻す行為は避けなければならない。となく、自然の中に消失した植物を導入することが、自然の回復につながると高く評価され、報道されることもあるが、もとの状況にはなり得ないことであり、むしろ「生態系の破壊」につながることを熟知してほしい。

## 新 潟 日 報

2000年(平成12年)12月12日 (火曜日)

### 日報抄

二十世紀が終りに近づき、さまざま計画や構想が新聞の紙面をにぎわしている。その中に「緑の百年物語」がある。植樹や里山の手入れを重ね、二十一世紀に緑豊かな新潟をつくり出そうというものだ▼計画もほぼまとまり、二十日に「にいがた緑の百年物語緑化推進委員会」が発足する。この夏、百年物語の唱導者の一人で作家の新井満氏の、子どもの感性を引き出すため長岡市の川崎小学校に「森」をつくった元小学校長、山之内義一郎さん(70)の対談が東京・ネスパスで開かれた▼「森のある学校っていいのは百年物語の原点です」と新井さんは切り出した。緑を植えていく、その心構えとなっているのはイマジン(想像する)なんだ」と語りかけた。山之内さんは森づくりの本質を指摘されたように

総 合

12版

(昭和16年7月30日第三種郵便物認可)

(日刊)

うれしかった▼二十世紀に忘れられがちだった「循環再生」永劫(えいきわ)という価値観を伝えようと、山之内さんらは子どもたちに「落ち葉を森へ返そう」と語りかけてきたのだ。そうだ。落ち葉さんはかわいそうだよ。お父さん、お母さんの所へ帰してあげよう」と子どもらは応じたという▼森を通して、大人の及ばない感性が育っていた。新潟の教育界では顧みられなかった町場の学校の森づくりによそからの関心が高まっている。「新潟に学べ」と昨年、学校関係者が大挙してやってきた韓国では学校の森づくりが本格的に始まったという。仙台でも新しい動きが出ています▼「木を植えよう、杜をつくらう。100年後のこのまちのために」と始められた運動の柱が学校の森づくりに。緑百年の取り組みを根付かせるために、学校は格好の舞台に思える。